

# 多宝寺への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

日蓮、故最明寺殿に奉りたるの書、立正安国論御披見候か。未萌<sup>みぼう</sup>を知りて之を勸へ申す処なり。既に去ぬる正月、蒙古国<sup>かんちやう</sup>の簡牒到来す。何ぞ驚かざらんや。此の事不審千万なり。縦<sup>たと</sup>ひ日蓮は悪<sup>にく</sup>しと雖も勸ふる所の相当たるに於ては何ぞ用ひざらんや。早く一所に集りて御評議有るべし。若し日蓮が申す事を御用ひなくんば、今生<sup>こんじやう</sup>には国を亡ぼし後生<sup>ごしやう</sup>は必ず無間大城に墮すべし。

此の旨方々へ之を申さしめし処なり。敢へて日蓮が私曲<sup>しきよく</sup>に非ず。委しく御報<sup>あず</sup>に預かるべく候。言<sup>ことば</sup>は心を尽くさず、書は言を尽くさず。併<sup>しかしなが</sup>ら省略せしめ候。恐々謹言。

文永五年<sup>戊辰</sup>十月十一日

日蓮花押

謹上 多宝寺侍司御中